

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会記録

平成 30 年6月 21 日(木)午前 10 時 02 分～午前 11 時 02 分(9階 908 会議室)

○出席委員(10名)

委員長	高木 克尚	副委員長	尾形 武
委員	沢井 和宏	委員	二階堂 武文
委員	鈴木 正実	委員	根本 雅昭
委員	小松 良行	委員	村山 国子
委員	小野 京子	委員	渡辺 敏彦

○欠席委員(1名)

委員	山岸 清
----	------

○議題

- 1 意見交換会について
- 2 今後の調査について
- 3 その他

午前10時02分 開 議

(高木克尚委員長) おはようございます。ただいまより東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を開催いたします。

本日、山岸委員より1日間欠席の届け出がありましたので、ご報告いたします。

さきの6月定例会議におきまして、高校生との意見交換会を行うために必要な委員会条例の改正案が議決されましたので、意見交換会の開催に向けて、今後検討を進めてまいりたいと思います。

そこで、本日はまず意見交換会の基本的な方向性についてご協議をさせていただきたいと存じます。

高校生との意見交換会を開催するにあたって皆さんにお諮りをすべき点が何点かございます。

まず、1点目として、対象とする高校生をいかに判断をするかということであります。本特別委員会の調査事項であります競技開催を子供たちの夢や希望につなげることについての意見を聞くためには、野球、ソフトボールの競技開催に限定をせず、広く子供たちのために何ができるかということを検討するために、対象は野球部などといった限定をしないこととしたいと思いますが、皆様からご意見を賜りたいと存じます。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 最終的には学校なんかの協議が必要なもので、そういうところで体育部以外というがちがちの決定にはなりませんけれども、一応対象校としてはスポーツ部等々に限定はしないという

ことをご確認を賜りたいと存じます。

相手の高校の選定については、当委員会のスケジュールと相手方のスケジュールの問題等もありますので、高校の選定、スケジュールについては正副委員長にご一任をいただきたいと思うのですが。

【「お願いいたします」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 高校生の声を聞くということは、こちらから相手方に行って、相手方の学校の中で子供たちとの意見交換会をしたいと考えておりますので、ある程度学校でもやっぱり事前の調整も当然必要になってくるだろうと、こんな思いもありますので、スケジュールも含めて学校の選定については、ただいまご確認いただいたように、正副委員長にご一任をいただきたいと存じます。

3点目として、高校生との意見交換会のテーマでありますけれども、これまで当特別委員会で一番最初に委員の皆さんから調査すべき項目の中の幾つか、例えば復興オリンピックについてはどう考えるか、あるいは市民参加はどんな方法がよろしいのか、あるいは夢につながる体験はどんなことがあるのか、こういったものはこれまで皆さんと一緒に調査を進めてきた中では踏み込んでいない項目もございます。かといって、この3点に絞っていいのかどうか、あるいはもっと大まかにテーマだけを決め込んで学校側に打診をしたほうがいいのか、そんな方法もさまざまあるかと思うのですが、まず高校生の皆さんにこれだけは聞いておきたいのではないかと、これまで、先ほど申し上げましたように、踏み込んでいない課題について高校生に聞いたほうがいいのか、そんな考えがあれば、ぜひここで皆さんからお述べいただきたいなと思います。

(村山国子委員) 佐々木優の一般質問でも取り上げられたのですけれども、LGBTに関して、これまでこの委員会でも全くその部分というのは学校教育の中にもぜひ入れてみたいとあって、そういう意見がなかったのも、そういう視点も必要かなというふうに思って、オリンピック憲章の柱である人権、平和と人権の、人権の中のひとつだというところで、やっぱりそこ結構大きいのではないかなと、同じ会派なのですけれども、そういうふうに思ったものですから、ぜひそういうのも入れてほしいなというふうに思いました。

(高木克尚委員長) 大きく言えば、オリンピック憲章について若い人はどんなことを考えているのかということですね。

(村山国子委員) そうです。

(小松良行委員) さきの視察でもそうだったのですけれども、高校生という対象だから、どうかというのがあるのですが、海外、そして参加国との文化的な交流というのですか、長野ではいまだに9カ国でしたっけ、まだ参加国との、小学校だったっけ、子供たちと文通ではないのですけれども、交流が続いているということが非常に印象的に思っていたところで、こうした、でも競技は野球、ソフトボールしか、しかも1試合ずつしかありませんけれども、高校生らがそういった競技を通じてでなくても、他国に対して非常に文化的なことや、あるいは同世代の学生たちが思っていることというふうなことで、いろんな日本の文化を発信したり、あとは向こうの国の高校生らと色々な形で交流が図れ

るような、そうしたこともいかがかなというふうには思うのですけれども。

(高木克尚委員長) オリンピックを契機に国際的に文化交流、高校生レベルでやることが考えられますかとか。

(小松良行委員) そうです。

(高木克尚委員長) 復興に関してはどうですか。復興オリンピックの位置づけに関しては。

(小松良行委員) 特産物であるモモをPRするとかなんとかなんていっても、高校生対象にしてはなかなか意見が出にくいところなのですが、これは江東でしたっけ、福島でも缶バッジのようなオリンピックを盛り上げようとかというようなものを、例えば高校生とか、大学生でもいいですけども、そういう方々にデザインをしてもらって、みんなでこのオリンピックを盛り上げるのだということの機運の上昇のために、それは機運の上昇イコール、やっぱり福島の復興をPRできる何か高校生レベルで、復興といっても、というか、オリンピックを契機に福島の復興をPRしていくのだという、イコールの上にちょんちょんつきますけれども、何かみんなで盛り上げていく方法としてどうなのだろうかなんていうことをちょっと皆さんに問いかけてもいいのかなと思ったりしますけれども。

(高木克尚委員長) 復興機運のための何かアイデアありませんかとか、そんな聞き方もありますよね。

(小松良行委員) 例えば江東ではこんなことを若い人たちがやっていたよとか、何か紹介しながら引き出していくとかというようなことがあるのかもしれない。もしかすると、済みません、続けて。例えば今回の視察のちょっとした報告を最初に、何かありませんかというのではなくて、この間の視察の写真ぐらい残っているのかわからないですけども、こんなことでちょっと視察してきて、各視察先での取り組みでこんなありましたと、ちゃっちゃとダイジェストの報告をしながら、福島は今こういうことですよと。その中で皆さんの声を聞きたいのだということになると、少しイメージが出てくるのかなんて思ったりしますけれども。

(沢井和宏委員) 先ほどの高校の選定については一任ということは、希望的にはいろんな高校から参加して、いろんな高校の声を聞きたいなという思いはあるのですけれども、なかなか現実的には難しいので、一任は構わないのですけれども、高校生の中で、多分生徒会なんかで、高校同士のネットワークがあるのではないかなと思うのです。だから、一応意見交換会をするのは1校であっても、横の、市内の高校の生徒会か何か、連携とりながら、高校として、みずからが何か盛り上げるための取り組みがどんなことができると思いますかというような、そういう自分たちが、ある程度高校生が主体となって取り組めるものを横に広げる、何かそういうのが提案できないかなというふうなことを聞いてみるのもいいかな。

(鈴木正実委員) 高校生ということで、我々の認識って非常にかげ離れた世界になっている部分あって、まず高校生がオリンピックと聞いたときに何を自分たちでできるのかというその意識を確認するということがまず大事なのかなと思うのです。その中で復興とオリンピックという、これは大人の考えている話でしかないのかな。もっとオリンピックと、では自分たちがかかわっていく中で、地域の

伝統であったり、文化であったり、あるいは震災から立ち直ってきた自分たちの姿であったり、その辺、子供たちの自由な発想の中でオリンピックと何という組み合わせを考えさせるような、考えてもらうような。

(高木克尚委員長) オリンピックに向かう本音だろうね。

(鈴木正実委員) 本音です。

(高木克尚委員長) そこをまず聞きたい。

(鈴木正実委員) ええ。なおかつ福島市がホストタウンでスイスという限定的なところをやっている部分もあるので、そういう一定の国に絞らないで、全般的な見方の中で高校生がどう捉えて、どういうふうに自分がオリンピックにかかわっていきたいのかという、そういう意識の調査という、聞き取りみたいな、意識の聞き取りというのですか、そういうことが重点になるような気が私はしています。さっき沢井さん言ったみたいに、ほかの高校生に情報発信という、みんなで一つの考え方になってオリンピック迎えるのだとか。肝心ではないのでしょうけれども、オリンピックが終わった後、自分たちがどう生きていくのかというのが多分一番大事なテーマになってくるのだらうなと思うのですけれども。かつて環境面でいろんな作文に応募して金賞をとった子が、実は法政大学の環境関係の学科に行って、今大林組で環境開発のほうの仕事行っているとか、そういうような話なんか私も、福女出身の子なので、聞いたりすると、高校生のときの経験が後に大きくなっていく、その意識づけというのがその時代の一番大事なことなのではないかなというので、その辺、改めて聞くというよりも、感じてもらうほうが大事なのかな。済みません。抽象的な話で。

(二階堂武文委員) 私も、復興オリンピックって、この図面はありますけれども、若い人からすれば、復興オリンピックという投げかけよりも、今の福島の元気さをどうPRしたらいいのみたいな形で、そういったスタンスでの投げかけなのかなという気はすごくします。それが本来的に私どもが意図している復興の今の福島の元気な姿を伝えるということなのでしょうけれども、子供たちからすれば、今の現時点の状況を、どんなことを、元気な福島のどんなところを海外の人とか何かに伝えたいと思うのみたいなレベルでのやりとりになるのかなという気がちょっとあるのですが。

それと、私、改めて、やっぱり東京視察行ってまいりまして、今回の質疑を聞いていてもそうなのですが、東京都の教育委員会さんの子供たちに特に身につけてほしい5つの資質というのが資料として渡されましたけれども、ボランティアマインド、障害者理解、スポーツ志向、日本人の自覚と誇り、豊かな国際感覚と、子供たちにこれを1つきっかけに育みたいという話だったのですが、この切り口って意外と質問の項目整理にもすごく役立つような気がするのです。やっぱりこれを、意見交換会を機に子供たちのボランティアマインドにちょっと火をつけるというか、目を向けさせるとか、障害者理解について目を向けさせるとか、スポーツ志向は当然なのですが、日本人の自覚と誇りに対して、そんなこと考えたことなかったのだけれども、これをきっかけにちょっと考えるきっかけを、意見交換会を通して子供たちに種を植えつけるとか、国際感覚もそうなのですが、そういった意味では東京

の視察というのがすごく生かされて、その上に福島市で若い人たちの高校生の子供にそういった感覚とか問題意識、考え方の種をまいていくみたいなのを意見交換会を通じてできれば、それは今までのことも生きてくるかなと、連続してくるかなという気はすごくちょっとするところがあります。

(高木克尚委員長) ひいては沢井委員が言うようなネットワークづくりにも当然つながるし。

(二階堂武文委員) そうですね。

(高木克尚委員長) ただいま後ほど協議をする提言の内容まで含まれたので、非常にありがたいような、まとめるのが苦勞するような。ありがとうございました。

(小野京子委員) 私も2点あれなのですけれども、今二階堂さん言われたように、オリンピックってやっぱりスポーツ。今回もサッカーというと、本当に若い人がみんな盛り上がって、今回のサッカーの試合もすごかったので、地域とか、まちづくりのやっぱりスポーツ振興のあり方というか、そういうかかわりみたいなのを若い人はどう考えているのかということを知りたいなということで、スポーツ志向とかであった、そういうものを今回聞いてみたいと思います。

(小松良行委員) しかしながらというところで、余り広げてしまっても、高校生から聞くにあたって、限られた1時間半とかいう中でこちらの投げかけ、それについて意見をいただくということになると、イメージしやすいもの、例えばせいぜい3点とか、こういうことについてみんなからは意見聞きたいのだというためにある程度、それとこういうオリンピック、もう二度と開催されることもないかもしれないようなことで、福島の復興というふうなことに、復興といっても何か作業するわけではなく、盛り上がりというふうな、福島の現実を、現状を発信していくのだという中でどんなことができるのでしょうか、あとはやっぱり競技があれですから、文化とか、あとは先ほどもありましたけれども、ボランティア、皆さんが協力できるボランティアって何なのかとかというものをある程度絞り込みをして、何か意見していただけるようなものにしないと、こういう大局的なストーリーでもって、こういうことではどうでしょうと並べても多分なかなか。あと、まとめられなくなってくるので、何か今のご意見の中で絞り込みをしていかないとならないのかなという気がします。

(二階堂武文委員) 本当におっしゃるとおりなのです。そういった中で、逆に私どもも、一般論でのやりとりでは意見交換会の意味がないような気がするのです。先ほど高校の選定とか何かについては正副のほうに一任、お願いするという形にしましたが、これは具体的な話になってくるのですが、その過程において今の議論がどう生かされるかという気がするのです。これは、あくまで私の想像ですが、どこか協力してくれる高校があると。その中で、その高校の中にはボランティアサークルもあれば、障害者の何かサークル、障害者向けにいろいろ活動しているサークルもあったり、当然スポーツクラブの人もいたり、また華道とか茶道とか、日本文化についていろいろやっている高校生もいたり、国際的な交流をやっているサークルもあったりするかと思うのですが、できましたらそういった分野でちょっと頑張っている子供たちに意見交換会に加わっていただくようなことで、多分そこでは、先ほど出ましたけれども、赤十字とかのいろいろボランティアは多分県内の高校生とか全国の何かつな

がりがあって活動しているような子たちもいたり、障害者もしかり、ボランティアもしかり、スポーツも当然ですけれども。あとは、国際交流とか何かで頑張っている高校生もいたり、それはそれでまた高校を超えたつながりもあるかと思いますが。そういった子供たちに集まって、そういった子供たちと意見交流すれば、単に一つの高校にとどまらないで、いろんな広がりが見えてくると思いますので、市内、県内、県外という形で。ただ、限られた人を限られた場で呼んで意見交換するといったときに、その辺の相手方の人選というのがやっぱり話の中身をどう深めていけるかどうかにかかわってきますので、そういった発想というか、視点で高校さんと今後交渉していくとかいうことがやっぱり一つのポイントになってこようかなという気はすごくいたします。

(高木克尚委員長) 当然当委員会のこの趣旨を丁寧に説明しないと、学校側も受け入れる意識に差が出たのではちょっと困るので。今言ったように、丁寧にこちらの意思をまず説明するところから入らなければならないので、テーマもある程度は決めた上で交渉しなければならないなどは思うのですけれども。一つのポイントとして、高校生全体に広がっていくようなネットワークづくりのアイデアを語っていただきたいなというのはいい方法かもしれません。

(沢井和宏委員) そのネットワークづくりなのですからけれども、何年前に多分全国の総合文化祭を福島でやったのですよね。だから、それがまだその雰囲気が残っていればいいものにできるのではないかな。

(小松良行委員) あと、今テーマですけれども、その記録というのを例えばだらだらと議会の本会議場みたく映像として中継するのでなくて、撮っておいて、いろんな発言とか何かをぎゅっと縮小した特別委員会の模様などを発信できないですか。高校生とそういう意見交換するというふうなことでさまざまな意見、よい意見をチョイスしたものとかというのを編集して。これは、議会側からの発信もそうですけれども、要はこれに参加しなかった高校生たちが、あるいは市民の方々がごらんになって、このオリンピックに向かう、余り関心を持たなかった人たちの動機づけとか、あるいは参加しなかった学生たちも、こういうことを話し合っているのだな、私たちもそういう機会があったら参加したいなと思えるような、発信の材料の中にそういったことも、記録としておけば、後でベースに載せることできるのかなと思ったりするのですけれども。

(高木克尚委員長) では、ここは承諾を得なければならないので、そういう記録も残した上でという発想は大切にしておきます。映像で残すと。

(根本雅昭委員) 先ほど沢井委員の広がりというのは私もすごく期待するところで、広がりというと、多分今の高校生だと、SNS、LINEや何かで、あっという間に広がると思うのです。ですので、この意見交換会が終わってから、きっと高校生たちがいろいろ友達同士で、こういうことがあったとか、そういう情報って意外と、さあっとあちこちで流れることを期待するわけなのですけれども、そういう中で出された意見なんかこの後酌み取れるような、これというアイデアはないのですけれども、そういう後につながったアイデアもこの委員会で酌み取れるような仕組みがあったらいいなとい

う、これとってどうしたらいいというのはまたちょっと、ううんというところなのですけれども。例えば学校を通して何か先生方が集約してとか、あとは学校に一声かけておいて、その後何か高校生から先生を通して意見があったら教えてくださいとか、そういう一言を話しておくだけでも違うかなというのは思いました。

(高木克尚委員長) 私も個人的にそこを本当に心配していて、何かつまらない人たちが来て、つまらない話して、やってきましたなんていうことを話されたのでは何のためにやったかわからないので、学校として、子供たちにこれはやっぱり学校の授業の一環なのだぞと、福島市議会と意見交換するのだぞという、その位置づけ、格付もきちんと学校側に理解していただかないと、子供たちが自由奔放に発信をしてしまうというおそれが私は個人的には思っています。今おっしゃったように、いい意味で発信していただく分にはいいことなので、そこも注意してちょっと学校側とは相談させていただきたいなど。

(根本雅昭委員) そうですね。いい方向に行けばいいでしょうね。

(高木克尚委員長) 逆に言うと、映像を撮るなんていうことは意外と歯どめになるのかなという感じしますけれども。

(小松良行委員) 編集したものだから、参加した学生が流してくれると、自分の発言したのも、あなたたちと結構頑張っているいろんなこと、若者も加わってやっているのだなんてなってくるというなと思います。

(渡辺敏彦委員) これ意見交換というよりは、高校生の意見を聞くということでしょう。だから、変なおじさんが変なことを言っていたという話にはならない。向こうが言うことだから。高校生、我々とは多分発想が違うから、いろんな発想を持っていると思うのだ。だから、例えばさっき言ったように、野球とかソフトにこだわってしまうと偏った話しか聞こえないから、総合的な話の中でいろんな子供らが集まって、いろんな話を聞くというのはいいことだなとは思いますが。こっちは、意見交換なのだけれども、こっちから余り言うのではなくて、子供らがオリンピックに対してどう考えているかと聞かなくてはならない部分もあるのでしょうか。だから我々はいろんな勉強してきているから、こういうことを期待したいと思うのだけれども、高校生、オリンピックに対してどういう思い持っていて、どういう期待しているのかなと、高校生の立場として。そういうことを聞いてくればいい話。我々は、こうだろうなんて勝手なこと、いろんな勉強しながらここで言っているけれども、高校生はそんな感覚多分ないかもしれないよね。そういう子供もいるかもしれないけれども。だから、総合的な部分でどういうことに期待していて、例えばこちらから話しするときに、君たちだったら何できるかなとか、どういうことをしたいかなという投げかけだったら意外といい話が出てくるのではないかな。とっぴな話も出るかもしれないけれども。その辺のレベルでいいのではないかなと思うのだ。こちらが余り偏った話持っていてしまうと、これもさっき言ったように、変なおじさんが変なことを言っていたみたいな話でほかに流れるかもしれない。発想、考え方が多分高校生違うと思うから、今。根

本君一番近いから、わかるかもしれないけれども。

(二階堂武文委員) 本当におっしゃるとおりだと思うのです。ただ、そのベースを考えたときに、やはりそれを子供たちが例えばボランティアをやっている、スポーツ活動をやっている、障害者との交流を一生懸命やっている子供たちに、それを福島で開催されるオリパラにどう結びつけることができると考えていますかみたいなふうを持っていくためにも……

(渡辺敏彦委員) 各論的にはそれはいいのだけれども、総合的な部分で聞いて、例えばボランティアとして高校生が何できるかなとかという話になったときに、その子供が入っていないなくても、やっている子供が入っていないなくても、高校生の中でもそういうことをやっている人いますから、いろんな形の中で使えるのでないかいと、もっと高いところの場所と言うと変だけれども、総合的な部分でとりあえずやっていかなくてはならないのでないかと思う。

(二階堂武文委員) 多分、別にパネルディスカッションというわけではないのですが、限られた1時間とか90分とかの時間の中で、それなりの濃さのある話というか、持っていくためには、この意見交換会に参加する子供たちが、スポーツであったり、ボランティアであったり、それなりの高校生として経験を積んで、自分の高校だけではなくて、全国的にも何かつながりあるかもしれませんが、そういった子供たちとの意見交換会にしないと話は深まらないというか、何か結果が平均的な、薄っぺらなもので終わってしまうような、そこがやっぱりこの意見交換会のポイントになってくるだろうし、そこをきちっと学校当局にもお願いした上で、一つの構成というか、持っていき方を考えるというのが成功させるポイントになってくるのかなという気はしますが。

(鈴木正実委員) 基本的なところでちょっと確認をさせていただきたいのですけれども、選ぶ高校生というのは、学校にこっちから行くとなると、1校の高校生だけという対象になる、それとも何校かそこに集まってもらって話をするのか。県立も入って、私立も入って、全体としてやるのか、そのあたりはどういうふうに仕分けする。

(高木克尚委員長) 基本的にはこちらからお邪魔してお話を伺いたいというのがスタンスです。ですから、1校に絞らず、2校、3校という方法も当然選択肢には入ります。ただ、どこかに集めてという方法は今回はとらないつもりでおります。

(鈴木正実委員) そうすると、行ける学校数というのは限られた学校数になるということですね。結局我々も、ではここに行って、次、ここ行って、ここ行ってという3カ所ぐらい回るという感じなのですか。

(高木克尚委員長) 選択肢ですね。

(鈴木正実委員) そうなると、先ほどから言っている子供たちというたちになかなか結びついていかないのではないかなという気がしているのですけれども、その高校、高校によっていろんな考え方あるでしょうけれども、やっぱり先ほど兩名のおっしゃっていることはまさにそのとおり、概論的に捉える部分、個別的に捉えていかなくてはならない部分って絶対あるのだと思うのですけれども、私自

身、一番最初に言ったとおり、どういうふうにかかわっていくのだという、まずそのところがきちんと捉えられないと、どの高校でも話が個別的な話だけになってしまって、收拾つかなくなってしまうような気がするのです。

(二階堂武文委員) そこですね。そこは、プロデュースする側の私どもの委員会の資質が問われるところというか、いうところですね。

(鈴木正実委員) その範囲が狭いという領域になれば、当然今二階堂さんが言ったみたいに、絞ってがっちり聞くというやり方にならざるを得ないのかな。多くの高校生がいる、それこそ10校ぐらい集まって、その中で概論として聞くのであれば、さっき私言いましたけれども、どういうふうにオリンピックにかかわっていく、この経験はどういうふうに生かすのだ。もっと福島市がオリンピックを迎えるにあたってどうあるべきなのだとかという、そういう概論的な話を聞けると思うのですけれども。個別的になっていけばなっていくほど、そのあたりは難しい意見聴取あるいは意見交換ということになってしまうのではないかなと思うのですけれども。

(渡辺敏彦委員) 最初文書を出すときに、高校に出すときに、こういう話し合いをしますよと出すときに、例えばさっき言ったボランティアの部分とか、話し合い、交換会やりますよ、こういうことについて考えてきてくださいよというのを出しておけば、具体的な話になるのもあるのだからかもしれないのだ。だから、どういうことを期待するのだ。将来的にどういうことを期待できるのだというのものもあるでしょう。スポーツのことを書く人いたり、愛国心のこととか、ボランティアとか、いろんなこれ考えてくると思うのね。だから、いきなり行って、いきなり何か言えといったら、多分出てこない。先にこっちから、こういうような内容でと通知出してやれば、出てくる子供は一生懸命考えてくるでしょう、高校生なりの発想で。そうすると、本当に細かくいろいろ出てくると思うのだ。だから、そこら辺はその下の部分で、細かい部分については。先にその部分を書くだけで書いてやって、考えて持ってきてもらえばいいわけでしょう。

(鈴木正実委員) それが二階堂さんさっきから心配しているところなのだと思うのです。

(渡辺敏彦委員) いきなり意見交換会、例えばボランティアについてとか、スポーツについてと書いてあれば、それだけになってしまうでしょう。

(鈴木正実委員) ただ、私思っているのは、個別的な学校が3つぐらいだったときに、それはその子供たちの考え方ということで、全体的な物の見方にはなかなかかなりづらいのではないかなと思うのです。だから、そこのところだけなのです、私聞きたかったのは。今のお話を聞いていて。

(渡辺敏彦委員) 誰を呼ぶかというのはあるからね。多分生徒会か何かの役員よこすのかな、先生のところで。

(鈴木正実委員) 不可能かもしれないですけども、例えばオリンピックを迎える子供たちを、やっぱり何かの肩書で、ウェルカム大使みたいな感じで、高校から2人ずつぐらい出してください。アオウゼに集まってみんなで議論しますよというやり方。要するにオリンピックウェルカム大使がこれだ

け学校から出てきて、みんなそういう意識で集まっているというやり方もあるのではないかなと思うのです。そのときに、先ほど小松さん言ったみたいに缶バッジが、必ずここにウェルカム大使の缶バッジがつく子供たち。あとは、それが学校に帰ったときに、みんなでやろうといったときにはその缶バッジがきちっと配られるとか、何かその動機づけの中にいろんなアイデアを入れた一つの固まりをつくるときに、抽象的な固まりを各高校から集まってもらうというやり方が何となくできれば、もっと幅広い考え方ができるのではないかなと思うのですけれども。

(小松良行委員) おっしゃることはごもっともなのですが、結局どういう授業、やっぱり相手は高校生ですから、まずはオリンピックの競技がこの福島で行われることをイメージしつつ、自分たちがどういうふうにかかわれるかということが発表しやすいように、先ほど来、話をやっていくとテーマをある程度絞り、そしてそこに自分たちのかかわり、どういにかかわりができるのかというふうに投げかけて、今回は、多分こういうことをやったらいいのではないと、結局授業になっていくと思うのです、高校生の考えることって。ここでこんなふうなものを私たちも一緒に、ビラ配ったらいいのではない、したらいいのではないとか、あるいはごみとか落ちていたらそういうのを片づける人も必要なのではないか、多分そういう授業的なことがいっぱい散らばってくるのかなとかとは最初に思っていて、そういう中から今度、第2ラウンドではないですけども、高校への広がりはどうするのか。その中に、今言った、みんなで、何とか大使とかといういろんな名称をつけて、PR部隊を、それが各学校へ全部散らばっていくと。次のステップ、その次のステップとかという中で今度広がっていきけるように、授業が具体的に見えるようなものをどんどん言ってもらおうという機会にして、今回はするのがいいのかななんて思ったりするのですけれども。

(渡辺敏彦委員) 缶バッジつけようというのは高校生の発想で出てくればいい話。こっちから、ここで余り考え過ぎていると、変なおじさんになってしまうのだ。だから、高校生がそういう発想をどんどん出してもらって、こっちで何ぼ受けられるかだけでしょ。

(鈴木正実委員) 今私が言ったのは例えばの話で。

(小松良行委員) わかります。そのとおりです。

(鈴木正実委員) それに固執するわけでもないし。

(渡辺敏彦委員) それに限らずだけれども、総合的に具体的な部分までやっていくとそうなるから、逆に高校生からそういうのが出せるような形をとればいいということでしょう。

(鈴木正実委員) 対象とすれば、やっぱりもうちょっと幅広い、市内の県立校、私立校含めてとか、その中から二、三人ずつ校長先生に選抜してもらって、来てもらって、可能であればですよ。そういう人たちに話をしてもらおう。私の高校はこう考えているとか、何かそういうようなほうが、変な話ですけども、取材するほう、例えばテレビなんかが入って一番絵にしやすいやり方なのだと思うのです。個別の高校だけになってしまうと、学校にカメラ入っていくってなかなか大変な世界で、何となく不特定なところでいろんな人間が集まってもらってという。ただ、その選抜は学校にお願いします、

趣旨はこうこうこうだというようなことで、それについて考えてきてもらって、意見を述べてもらうというやり方が何となく私は幅広い感じがするなという気するのですけれども。

(高木克尚委員長) 二階堂委員が言うように、一番ハイレベルな脚本が必要になってしまう。

(二階堂武文委員) 私も一番は今言われたところが一つのポイントになるのです。学校に投げかけして、学校がどういったふうに、2名か3名なり、5名なり6名なりの人選を考えるかといったときに、生徒会の役員を2名だったら2人、会長と副会長をちょっと調整して行ってもらおうかとなったときに、話す内容が具体性に乏しくて、何か調べてきたようなことで話をしたときに、結果が、やっぱり見たり、読んだりしていても、いま一つ突っ込みが、話聞いていても高校生の経験が聞けるわけでもなければ、ちょっとそこが浅いものに終始してしまうのではないかというのが危惧されるのです。そういう中で、先ほど言ったように、スポーツを3年間一生懸命頑張っているとか、ボランティア活動をやっているとか、これを通して子供たちに育みたいと私どもが視察とか何かで学んできたことを実際現場で、高校生活の中でやっている子供たちに集まってもらって、その中で、では福島でせつかくオリンピックが開催されるということで、それと結びつけた発想で何か考えてありますかとといったときに、具体的な高校生活の中での活動での経験であったり、交流であったり、他校との交流であったり、全国的な交流であったり、そういうのが生きた具体的な話が聞けるようになるのかなという気をするのです、一般論で終始しないで。

(沢井和宏委員) 高校に投げかけるときに、今ちらっと思ったのは、子ども議会もそうなのですから、我々現場にいるときも、指名して、その子の考えを書かせて出す場合もあるし、みんなに書かせて、あるいはみんなに議論をさせて、その代表としてそれらの意見をまとめて持ってくるという方法もあるのです。だから、高校に投げかけるときに、事前に、全部のクラスは無理でしょうけれども、幾つかのクラスをピックアップするとか、幾つかの部活とかサークルで、1回、短時間でもいいから、こっちが出したテーマについてある程度話し合ってもらって、団体としてみんなで話し合ったのをとおおよそまとめて発表してもらおうほうが、より深みのあるものになっていくのではないかなと思うのです。ピックアップしても結局は個人の意見として出てくる場合があるので。多くの意見がある程度高校の中で集約、集約まではいかないのですけれども、話し合われたというので出てくれば。例えば授業の中で、高校の教科でいうと社会とか国際理解とか、そういうテーマがあって、その授業の中でちょっと取り扱ってもらって、何人かの先生に取り扱ってもらって、そこの中で出た意見をクラスの代表とかにある程度おおよそまとめて話してもらおうような、そういうお願いはできないものかななんて思っただけなのですけれども。

(二階堂武文委員) そこポイントなのです。本当に今回の意見聴取で終わるものなのか、これをベースに2段、3段と打って出れる、それだけの体力と時間があるものなのか、またそれに向けてどれほどのコストが割けるのか、いろいろ、という部分と、今みたいなような形で、そこまで巻き込んでいけば絶対いいものにはなっていくのですが、この間の流れからすると、そこまでも踏み込めないよう

な、どこまでその辺も含めて。

(村山国子委員) 学校がやってくれるかどうかですね。

(小松良行委員) そこも考えていかなければならないのだ。

(村山国子委員) 学校も忙しくてね。

(沢井和宏委員) それが後になるか、先になるかもあれなのですが、最初に意見聴取会があって、そこから広がって、そういう活動が行く場合もあるしとは思うのです。

(二階堂武文委員) 子ども議会も今までの歴史と蓄積があるから、ここまでこうという部分もありますよね。

(沢井和宏委員) 今市議会としてこういう取り組みをやって、これで一応市のほうに提言をするようになるのですが、そこからつながって、市が何か高校生を巻き込んだそういう行事とか何か、そんな大きな予算でなくてもいいのしょうけれども、予算をつけて実際の事業というか、運営できるような、そこまで方向性を見定めてやったほうが私はいいいような気がするのですが、市のほうが予算をつけてくれるかどうかはあれなのですが、

(二階堂武文委員) それって私どもが、この委員会が、今までないような形で高校生との意見交換会をやって、その結果に対して教育委員会さんとか当局がどう、これ中身が濃いと、おもしろいと、ここまでの意見が高校生から聞けるのであれば、それに接続するような形で、教育委員会でこれやってみようとか、福島市としてこれやってみようか、それは私どもの意見交換の成果にかかっている部分も大きいなという気はちょっとします。

(高木克尚委員長) 前例のないことを行おうとしているわけですので、その辺も想定して皆さんの意見いただければ、1歩先に進めるかな。

(村山国子委員) もし県も教育の中でオリンピックを取り上げるというのであれば、沢井さんが言われたような方式をとってもらうことによって、やっぱり数人だけの意見ではなくて、いろんな意見が聞けるというのはすごく大きいなというふうに思ったのです。だから、県も本当にオリンピック教育の方向にも、県立高校になってしまうのかどうかかわからないのですが、やっていくということを考えてほしいというのは本当にあるのです。でないと、やっぱり広がりが出てこないとか、なかなか限定的に人を選んで意見を聞いたとしても、それが全体の意識になっていくかというのはなかなか難しいのかなという感じがします。

(高木克尚委員長) 高校生の本音を聞くというところはもう基本に取り組みます。あえて小学生、中学生でない高校生に聞く価値というのは、彼らは大人に一番近い年齢で、5年後、10年後を現実的に想像できる年代層だと思うのです。そこをちょっと刺激をしてあげたいなど。そのためにはどんな刺激材料にテーマがあるのかどうかということのをこれから悩まなければならないのですが、やはり当初我々の目的の一つでもあるように、将来福島市に何を残せばいいのかということところは、大人の我々の考えることと大人に近い高校生が考えることでは非常に温度差が出る可能性もありますし、当然

高校生が就職だ、進学だ、福島を離れて、では5年後、10年後、福島に里帰りしたときにどんなことがあったらうれしいですかとか、そんな聞き方は高校生ならでは聞けるのかな、そんな思いを僕はずっと持っていたのですけれども。

(村山国子委員) もう一つ。意見を聞いて、やっぱり返さなくてはいけないのではないかなという気はするのですけれども、聞きっ放しで、ああ、終わってしまったでなくて、やっぱり返せば、もっと広がりが出るのかなと。1回意見交換会をして、そしてその後どういう取り扱いになるかわからないのですけれども、もう一回やって、こういうふうになったよみたいになって返していけば、随分意識としては、高校生の意識としては変わってくるのかなという気がします、やりっ放しよりは。それが可能かどうかちょっと難しいのかなとは思いますが。

(高木克尚委員長) ほかにありませんか。

(渡辺敏彦委員) 総論、各論しかないのだから、いっぱい総論も各論も出ているから、正副委員長一任。

(高木克尚委員長) 申し述べましたように、やはり入り口とすれば、どんなテーマにしる、本音を、まず高校生の本音を聞きたいという、そこから絞り込みをしていきたいなど、こんな思いで正副委員長おりますので、ちょっと我々にお時間をいただいて、きょうのご意見をちょっと整理させていただきたいと思いますので、よろしくご協力お願いします。

では次に、今後の調査についてを議題とさせていただきます。

まず、資料を準備しておりますので、配付をさせていただきます。

【資料配付】

(高木克尚委員長) ただいまお配りした資料については、前回の委員会で鈴木委員からも情報提供がありました、平成29年度の県のオリンピック・パラリンピック教育についてまとめた報告の冊子の写しでございます。

内容としては、県の事業として市内10校で行われたオリンピック・パラリンピック教育について掲載をされております。

また、今年度は県内のホストタウン登録をしている市町村に範囲を広げて実施をされ、本市においても希望のあった学校に予算が交付され、同様の事業が実施される予定とのことでございます。

しかし、平成30年度の時点においては、県からの予算には限りがあって、市内全校ではなく希望校のみと、こんな実施でございます。また、実施内容、それから授業の目的などは各学校で検討されるということになっておりまして、県とか市で統一的なプラン、あるいはテーマが示されているものではないようでございます。そこがちょっと軽いかなど。

前回、私たち行政視察の終わった後の意見開陳で、委員の皆さんから、江東区の児童は全員が参加できるプランとなっていて、本市はこのままでは一部の児童しかかかわれないのではないかという心配の意見開陳がございました。こういったことなどさまざまな意見をいただきましたけれども、現状

を見ますと、本市においては、現状の事業内容では全ての児童生徒がかかわることは難しくなっております。また、2020年度以降の計画についても不透明であります。改善するには時間を要する大きな課題になってきたのかなど、そんな思いがしております。

そこで、皆様に、このオリンピック・パラリンピック教育について早急に当局に提言をしてはいかにかということをご正副委員長として皆様にお諮りをさせていただきたいと思っております。

なるべくゆっくりしゃべったのですけれども、流れはわかっていただけましたね。せっかく我々視察したのに、福島市はちょっと遅いのではないのと、そんな思いが皆様の意見開陳の中から感じ取れましたので、早急にこの緊急提言をしたいなど、こんな思いでこれからまず説明をさせていただきたいと思っております。

できましたら9月定例会議の委員長報告、当然中間委員長報告と提言という形になります。

提言を行う理由としては、ただいま申し述べましたように、江東区等の行政視察の結果、早急に子供たちに残してほしい課題がたくさんありました。こんな思いで、市で、2020年度に行われるオリンピック・パラリンピック本番の際に市内の公立学校の児童生徒全員がこのオリンピック・パラリンピック教育にかかわることができる、そんな思いから、市で統一したプランや方針が必要だということをご緊急提言の理由にさせていただければなど。2年前でも遅過ぎるのではないですか、そういうことを加えて緊急提言にさせていただければなど。

その上で、想定される内容を皆様にお諮りをしていきたいのですけれども、1つには、今申し上げましたように、2020年度にオリンピック・パラリンピックが体験できるような教育を今から実施をしていただけないですか。あるいは、オリンピック・パラリンピック教育が一過性で終わらないようにしていただきたい。あるいは、平成33年度に新たに始まります次期福島市の教育振興基本計画に、今回のオリンピック・パラリンピック契機に、そのオリンピック・パラリンピック教育を盛り込んでいってはどうですかと。こういった内容を緊急提言としてお示しをしたいなど、こんな思いをしております。

ただ、意見交換会の話もしなければならぬ委員会、新たに提言に向けて、今福島市が本当に不足しているのは何かという精査もしなければならぬので、もう一回当局からオリンピック・パラリンピックの教育の内容について聞き取りをもう一度したいなど、緊急提言のためにです。当然我々の調査事項が教育関係部門とオリンピック・パラリンピック推進室関係の当局説明を同時に行いながら、かつ提言内容もまとめていかなければならぬと。本当に申しわけないことなのですけれども、皆さんには少ない時間で苦勞をおかけするスケジュールになってしまうのですけれども、それでもよろしいですか。では、今までどおり調査内容を進めながら、新たに緊急提言をするための聞き取り調査を当局に行く作業も、教育をちょっと付加させていただきたいということで、ご意見、ご異存ないですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) そのようにさせていただきたいと存じます。

そこで、大変緊急で申しわけないのですが、次回とその次と日程を組ませていただきたい。7月10日火曜日10時。押さえてください。もう一つ緊急に入れます。7月24日火曜日。

(小野京子委員) 済みません。会派の視察。

(高木克尚委員長) では、24日ではなく、前日の23日月曜日午後3時ということで。

小野さん大変だけれども、次の日から視察。

(小野京子委員) 済みません。ずらしていただいてありがとうございます。

(高木克尚委員長) では、改めて確認を申し上げます。

次回の委員会を7月10日火曜日10時からと7月23日月曜日15時から、2回、緊急に設定をさせていただきますので、以上の日程でよろしくお願いを申し上げます。

正副委員長からは以上ですけれども、その他としまして皆さんから何かありましたらご発言をお願いします。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 以上で本日の東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を閉会いたします。

午前11時02分 散 会

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員長 高木 克尚